

戦国武将と土木



加藤清正「石引きの図」より（所蔵：愛知県図書館）

「戦国武将」、「戦国時代」という言葉から多くの人は、群雄割拠する乱世の時代を「武」に長けた「血生臭い」男たちが、天下人になるべく合戦に明け暮れる、そんなイメージを想起するのではないだろうか。

しかし、そういったイメージは「土木（事業）」という視座を介すことで、一面的なものであることに気付くだろう。多くの名だたる武将らは、ただ単に「軍事的知略」に長けていたり、武力的な「強さ」だけでその名を歴史に刻んでいるわけではない。時に彼らは、合戦に限らず、目の前に立ちただかる自然災害にも勇猛果敢に立ち向かう存在であったのだ。氾濫する川を制御するために各地で様々な知略をこらした痕跡が残っていたり、あるいは港湾を整備することで物流網を整えるなど、領民を積極的に「守ろう」とする「統治者」としての姿がそこから見えてくるだろう。

日本中世史研究の泰斗であった網野善彦は、様々な文献調査から「百姓」と括られた人々の中には「農」の従事者ではない山民や海民が数多く含まれていることを受けて、日本＝農業社会というイメージを一転させるような「百姓は農民にあらず」という言葉を残した（『日本の歴史をよみなおす（全）』）。

本号の特集では、そんな網野の言葉に倣いつつ、冒頭に示した戦国武将・戦国時代のイメージを転倒させるような内容も盛り込まれるだろう。すなわち、戦国武将は「武」のみにあらず、生活を守る治者」でもあったのだ。そういった戦国武将らの一面は、「市民の技術」とも翻訳される“civil engineering”（土木技術（者））へ脈々と継承されているのかもしれない。そんな歴史的想像を働かせることも、可能かもしれない。

特集 戦国武将と土木

戦国武将の城づくり

—中世の山城づくりと北条氏照の八王子城—

せ と じ ま ま さ ひ ろ
瀬戸島 政博*



はじめに

わが国の城の多くは、鎌倉～南北朝、さらには室町（戦国期を含む）までの時代（中世）に築かれ、その総数は全国で4万ヶ所を超えられていると言われている。それに対して近世（桃山・江戸時代）に築城されたものは200～300ヶ所に過ぎない^{1), 2), 3)}。

中世の城の多くは、山頂部に築かれた山城で、山頂部や尾根部を削平して曲輪（郭）を設け、山腹の急斜面を天然の土塁とし、要所に空堀や堀切を穿って敵兵の侵入や移動を妨げていた「戦いの城」であった（写真-1）。堅固な石垣と巨大な白亜の天守から構成される姫路城や漆黒の天守と広大な水堀に囲まれた松本城など、私たちが日常的にイメージする城とは遠くかけ離れた自然地形の特性を巧みに活かした城であった。それだけに山城づ



写真-1 復元された中世の山城
(月山富田城：島根県)

くりは、当時の武将らの戦術上の知恵と工夫に基づく独創的な土木工事（土工）であったと言えよう。

築城工事には土木構造物を築く「普請」と城郭建築を造る「作事」に分けられるが³⁾、本稿では、当時の土木技術である「普請」という側面から中世の山城づくりを俯瞰し、同時に戦国期の関東の覇者北条氏（後北条氏）の武蔵支配の拠点であった八王子城を例に、最新の測量技術を通じて、当時の山城づくり（普請）の痕跡をみていく。

1. 城づくりとその段取り

1.1 『築城記』にみる中世の城づくり

『築城記』は戦国期の「城づくり」集団が活躍した時代に記された築城の手引き書であり、『群書類従』巻四一九に収録されている⁴⁾。

『築城記』の冒頭には山城の構築法が記されている。山城を築く時には第一に水の有無を確かめることと記されている。これは飲料水が無ければ籠城戦においても日常的な警固態勢も確保できないためである。加えて、水の手（井戸・泉・貯水池）は遠くにこしらえてはならないとし、水が確保できる山城でも水源近くの大木の伐採や尾根部の堀切を注意している。さらに、山城は平城に比べて見渡しが優れているから、堀や矢倉（櫓）を低く造ると記している。他にも追手門、矢倉、井楼、堀、木柵、木戸などの造りについて事細

かく言及している。

また、平城の構築にあたっては、まず縄打（縄張）をして、城内の広さを確保することが重要とされ、土塁（土居）が巡ることを最初に計算して縄打をする。とくに、縄打にあつては、堀と土塁になる部分は縄を張っておき、その幅や位置をしっかりと決めておくことが記されている。

1.2 近世城郭での築城の流れ

次に、城づくりの参考として近世城郭での築城の流れをみる。

戦国の世が終わり、天下統一がなされた慶長・元和年間（1596～1624）には築城技術は著しく発達した。この時代を含めた近世城郭づくりは、①「地選」→②「地取」→③「縄張」→④「普請」→⑤「作事」の流れでなされていた。

①地選は築城の最も初期段階で、どこに城を築くか、大まかな地域を決める作業である。②地取は地選によって決められた地域の中で、どの範囲にどの程度の規模の城を築くかをより具体的に決める作業である。③縄張は、堀、櫓、門、曲輪などをどこに配置するかを決める城の設計、グラウンドプランの作業であり、実際に縄を張って作業したことからこのような名称が付いた。④普請は縄張に基づいて行われる土木工事そのものである。曲輪の造成、堀・土塁・石垣などの構築がなされる。具体的には、人夫・人足の動員、石材や木材の調達・運搬、石垣の建設、堀や土塁の構築などの作業がなされる。⑤作事は天守、御殿、櫓、門などの上屋構造物を建築する作業である。また、近世城郭では築城と同時に城下町の建設も行われ、経済的な利便性と有事の際の防禦を兼ね備えるものであった。

以上の近世城郭づくりの段取りからみれば、①～③までの作業が今日の土木計画に、④が土木施工に、そして⑤が建築に相当すると言えよう。

2. 山城の普請（山城づくり）

2.1 城地を定める（地選・地取と縄張）

山城は地形が険しく、守り易い天然の要害を巧みに利用して築城された。その理由は高い石垣や深い堀を造る必要がないためである。そして粗末な土工道具と多数の労働力を投入し、戦術上の知恵と工夫を最大限に発揮しながら山城づくりがなされた。平城であれば河川・池沼などの位置を考え、絵図上に設計し、この設計図を基に現地で縄打・縄張が行われたが、山城の場合は立体的に曲輪配置、塁壁の高さ、傾斜、堅堀、堀切の位置を決める必要から絵図上での設計ではなく、箱庭のように土砂を盛り、築城する山城の立体モデル（土図盤）を造り、山城づくりに利用したようである²⁾。そのような設計に基づき、現地で杭が打たれ縄打・縄張がなされる。縄のラインによって、塁線、空堀、土塁などの位置や角度が決められる。堀の位置には掘り込み作業が行われ、とくに急傾斜にした際の排土で切岸と呼ぶ塁壁を造る。また、戦国末期頃になると四方に板を貼り、その内部に土質の異なる土砂を入れ、それを突き固める版築土塁も出現した。

2.2 曲輪（郭）を築く

山城の主要部を構成する区画が曲輪（郭）であり（写真-2）、中心の曲輪を本丸（本郭・主郭）、それに続く曲輪を二の丸（二ノ丸・二之丸）、そして三の丸（三ノ丸・三之丸）と呼ぶ。西にある曲輪は西の丸、ほかの曲輪から突出していれば出丸と呼ばれている。

中世の山城では曲輪の数が多いが各曲輪の規模は小さい。一方、桃山～江戸時代に築かれた近世城郭の曲輪は大掛かりな造成工事で自然地形を大きく改変した人工的な地形となり、曲輪の数は少なくなるが、その規模は巨大となる。